

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	流水記：文苑
Author(s)	梨の舎
Citation	龍南會雜誌， 8 5： 6 5 - 7 3
Issue date	1901-06-03
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5133
Right	

ない。けれどもわれはなほ、白石と共に奇哉妙哉と叫ばざるをわないのである。時に今まで西の宮をこめた薄雲は、やうやく霽れてけたかき富士の姿は、高く水戸邸の松林の上にはあらはれ、今や没せんとする太陽は、富士の裾にひく紫の雲に、黄金の裏を縫いつけた。(一月某日記)

流水記

妹より

梨の舎

鶯の聲もやうやく妙になりまざり、てまことにうるはしき春となりたれば、さぞ兄君にも例の書板なぞ肩にして、せむらぎ流るゝ小川のはどり、あるは櫻の花影なぞに、例の寫生したまふらんところ推しはべれ。裏の山櫻も、今年は殊にわかしくさきにたれど、はや一夜の雨にはなくなたりて、今は桃の花うるはしくにほひはべる、されど兄君の殊によしさいひたまひし枝の花美しきを、例の健藏が折りとりて、父君にいたく叱られたるに、西の國の櫻きりし人のとも思ひいでられていとをかしくて。

きのふ片山の姉君は伯母君と共にまゐりたまひて、例の小川のはどりに、二人草花など摘みはべりしも、姉君は例のほゝめみもなくて、いと沈みがちにわはすに妾も心もどな々、なせにと問ひまゐらせしに、答はなく吐息のみにと重げに摘みたる花の上にたちぬ。手をひきてのかへさ姉君はいとかなしげに、おん身の兄君などゝかの小川のはどりに遊びはべりし振分髪の其折はいと罪なかりきなどかこちたまひぬ。

いちどろき伯母君は歸りたまふ時、妾をしげくと見給ひて、たん身もことはや十六なれば、とつぐにまもあらざるを、からかひたまふにいと耻かしくて、屏風の影にかざればべりしに、母君までいどたからかに笑ひたまひぬ。なんぼう耻しき思しはべりしよ。

暑中休暇の早くきたらんことをぬのりはべるは、ひたすら兄君のをかしき話きかんとてよ。

兄より

仰の如く日曜などに例の古書板携へて寫生に行くを日課の如くなせり。もし近からばたん身に見せたまふほどの傑作(但し小生の傑作)も其中にあれど、まゝならぬが浮世の常、とはあまり大げさにや。小川のほとりに絹さんが愚痴をこぼせしも其筈、五尺の男子たる小生とても、十年の間故郷の春色をこはねば、雨降る夜なさは寄宿舎のつめたき衾の中にて、つら／＼昔を忍びて、泣くことある今日此頃なるよ。思へば夢はほろなる振分髪の其折のこひしくて…………

暑中休暇の早くきたれかしとは、同じく小生の願ふところ。たもしろき話にたん身の腹きる笑きかんと近き中にあらんか。

妹より

をかしき玉章かたじけなくこそ。よひゆぐにつきて兄君にまみねまぬらするが如き心地せられて、うれしくたははべりぬ。

さる日伯母君のもとへまゐりて、例の如く庭づたひに書院の方へまゐりはべりしに、姉君はいとかなしげなるれも、ちにて障子の外へあはた、しく走ういでたまひしに、何事ぞと問ひまゐらせども、

「花ちゃんは立き、なんかして機だ」などいど必苦き答のみにて、柱によりて涙ぐみ給ひぬ。伯母君は、いつまでとでもらしきなどをつぶやきつ々いと不興げに奥へ入りたまひぬ。何事とは知りはずらねど、よりそいでゆねよしをたつねまゐらせしも、知すとのみにてあかしたまはねば、はしたなくもかごとがましきこと申しはべりぬ。詮方なくて家へ歸り、母君へありし事どもつげまゐらせしも、小兒等の知らぬ事よとのみにて何の仰もなかりき。いとぶいかしきことばかりにて皆不興げなるに、藏健のみは例のぶちつれて磯邊に貝ひらはんと走せゆきはべりぬ。

母君にしかられつ、も縫ひたる襦衣小包にて送りまゐらせたれば、心地あしくもはべらんが縫ひたるものと思ひてきたまひてよ。

兄より

此間の襦衣はれん身の親切と共に身につきてはなすまじと思ひ居りぬ。絹さんは此頃御機嫌うるはしからぬ由、あまりたゞをこねて伯母君をこまらすやうのことありては未來に焰魔の廳にて不孝の罪をとほるゝこともありやせんと影ながら心配し居る由れ身よりつたへたまひてよ。

妹より

はや桃は花もちりはてゝ梅の實も大豆ばかりの大きさになりはべりぬ。春雨の降る度毎に裏山の桑の葉も青ばみそめて、蠶も近き中にかへりはべらんかと皆々用意にいそがしき今日此頃よ。

其後例の姉君まゐりたまゐて、ひたすら終きの日のなめなる詞ゆるしてよどくりかへしたまふに、いと心苦うはべりぬ。かなしきものはべるにやとさうやけど何の答もなかりしが、終に姜はとつゝ身と

なりぬと、いともかすかにたまひぬ。いづこへといへどいらへたまはず。とつぐが悲しきにやと聞ひまゐらせば、うなづきながらひたすら沈み給ひて、今ねん身の兄君などぬたまはばいかに心強かるらん。されど遠き國にゐますとなれば、此世にたよるべきは只ねん身のみよとて妾をかきいだきて涙にくれたまひぬ。一度は妻とよばるゝ女の身のなとて、そをかなしみ給ふと聞ひまゐらせば、いつまでもかくてありたき妾が願よと、さびしくほ、をみたまひしかほばせのいかにあはれにはべりしよ。

兄より

絹さんはいよいよとつぎたまふ由、いづこへかは知らねども、をさなともだち一人失ひたる心地して小生も心細し。今まで只振分髪の友とのみ思ひし人もはや人妻とよばるゝに至りぬ。早きものは過ぎ行く時と、かはり行く人の境遇よ。若く花やかなる少女が時の翼に乗せられて色も香もなき老の旅路にいでたつを見ては小生は常にはかなき感想にうたれ、殊に花の如き少女がわづらはしき浮世の風に吹かれてしばみゆくを見ては涙も湧くよ。さはれかの榎と蔓草とのたとへの如く、互にむつまじくたすけあはゞ如何に世はたのしく、また幸福なるべきかは小生も知れど、もし榎の木のみさかへて蔓草は日影に力なくしばみゆかば如何にかなしき。はた思はぬ木にたよるべくならば蔓草の身のいかにあぢきなく世をうらむらむ。

さはれ、絹さんもはや年頃なれば老の父君母君の意に従ひて、さるべき方へとつがれんとをのり居る由ねん身よりつたへたまひてよ。

妹より

二三日前に蠶生をそめて此頃はいいそがしく、妾も桑つみなどして母君の手たすけつ、日をすどしはべる。

さる日も例の小川のほとりにて姉君と若菜などつみはべりし折、兄君のことづてつたへまゐらせしに、姉君はひたすら涙にむせびたまひぬ。や、たちて野に生へる葦を指ざしたまひて、此花も鉢などにうつし植ゑられなば如何に色香のうせやせん、などのたまひて、ものくるほしげにそをつみ、頗にあて、またもよ、と泣きたまひぬ。妾もなんぼう心苦しき思しはべりしかよ。

此頃姉君は折々思ひいでたらんやうに、心のまゝに飛び行く鳥はいかに樂しかるべき、人の庭にもうつしうゑられれば、むむ野の花は羨ましきかぎりよ、人の身はなぞてかく苦く窮屈なるべきか、もし父母なかりせば、淵に身をなぐるとも悔なき妾が身ぞやなど、ものぐるほしきとのみのたまひぬ。小川のほとりよりの歸るさに、たん身の兄君はいづ歸りたまふにやと、思ひいでたらんやうにとひたまひしかば、今二月の後にはといひはべりしに、またもふかく思にしづみたまひぬ。此頃はかほばせの色もわるくて、笑みたまふともいとまれに、例のバイオリンも主の織き指にふれられずとか。

兄より

此頃はさぞ養蠶にいそがしきとなん。小生は二三日來、ねられでまことにくるしき夜半をすでせり。夜たけて人皆の寝しづまれる時、チクタクと時計の音のさわたるをきくては如何にさびしき。殊に客窓に故郷をこひしたふ人の胸には其時計の音も針の如き思せられて。よなく心地あしくなやめり。さくやく小川の春の岸、梨の花咲く丘の麓、さては董多きかの鎮守の杜影あど、かゝるくるし

き夜半の夢にあらはれ、時には十年昔の我にかへりて、幼朋友と此等の野邊にさまよへる事もあれど、醒むれば客窓の下にうすき衾うちかぶりて胸に思を抱ける身ぞや、故郷をこひしたふとて、心弱しと笑ひたまふな。

A lingering light he fondly throws

On the dear hills where first he rose

どうたひしはたぞや、げに谷間をてらさずとも、あしたに登りきし丘の邊に袂別の光を投ぐる夕日を見ずや。さはれ我もし夕日ありせば、丘の故郷に最後の光をなげんは勿論、殊に其あした我若き光に口づけしと董の花なんどに袂別の光をあたへなん。あゝ我は今沈みゆく日のそれにはあらねど、我思は遠く故郷の春の野に飛べり、いなく春の野にしばみゆかんとせる花の上に飛べり、あ、思多き今日此頃なるかな。

絹さんはなほ憂に沈みぬ給ふとや、其心中を推しては木石の如き小生も涙いでぬ。いかなる家にとつかたまふかは知らねど、はや父君も老いたまへることなれば其み心をも推してとつぎたまふ方よからんと思ふはひがごとくや。人生の流はなだらかなる春の水の如くならずして、時にはたぎつ早瀬となり、淵となり、瀧となりてす、むものならずや。いづこにか早瀬なく、瀧なく、淵なき流あるべき、ふかく考へたる後思ひ決したまふやうつたへたまひてよ。また折あらば此文をも見せ給ひてよ。

ねん心地すぐれたまはぬ由、み傍にあらば慰めまつるへきすべもあらんに……
此間のみふみ姉君にみせ給へしに、み詞もなくていと心苦しきれもうち、よそめにもかなしくはべりき。

あくる日、いつもには似たまはで、姉君はさびしき笑を頬に浮へながら、とつがんと思ひ定めぬ、ねん身の兄君にもよきにつたへたまひてよと、さもさねくどのたまひぬ。いづこへと問ひまゐらせは、しばしいひよどみたまひしが、終に岡部へと答へたまひて、またもさびしげなる雲は眉のあたりにかゝりはべりぬ。しばしたちて、妾かの家へ行きたらん後もたゑずおとづれたまひてよ、墓に行くが如き心地しはべるに、もし花ちゃんのだのしげなる顔見では如何にさびしかるべきなど心細きことのたまひぬ。

其日は母君など、心よく語りたまひて歸りましぬ。其折菫の花を妾にたまひて、ねん身はいつもかくて……と聲くもらせて、そと涙ぬぐひたまひぬ。妾もかなしくてとみにことばもいでざりき。

兄より

少女にも似たるやさしき春は去りて、壯嚴なる夏は來りぬ。思へば春の生涯は短かりき、見よ花咲き匂ふ春の流水の如く去て復歸らざるにあらずや。あ、今佐保姫の盛装したるおもかげはいづこにかもとむべき。さねれ我はなほ此世に最もはかなき夢の如き人間の青春時代を見る。思へ若き血たぎつ頃の理想は何時に至りて實現さる、かよ、青春時代の理想は凡てこれ空中樓閣中のものならざ

文

るか、只徒に彼等は祖先の故郷を夢みるにあらざるなきか。彼等の胸中にはまばゆきばかりの理想は美しく輝けるも、かなしきかな、そは夕映の色よりも早く消れて、しかも息の絶えざるかぎり其痕跡はながく胸に止て弱き人の子をして無常の嘆をなさしめ、はたはかなき回想に泣かしむ。あ、最愛なる妹よ、我は今に至る迄其夢幻の如き空想を我身の存存よりも確なるものと信じたりき今まさに我誤てるを知りたるも、しかも一度我胸に受けたる傷は癒ゆべくも思はれざるなり。あ、凡ての幻影は遠く去りぬ。我理想の殿堂はここに壊たれぬ。我は今胸の傷の何たるかを説かざるも、しかも同情深き愛妹よ我胸中の煩悶を察せよ、察して爲めに一滴の涙をそ、げ。

絹さんは終に思ひさだめし由、我はたゞ我友及び彼女の永遠の幸福をいのれり、

兄より

宛

かなしきみ文讀みはべりて、ひとひ胸をいだきてなきぬ、青春の夢のいとはかなきは夕榮のそれにも似たりとかや妾もしか思ひはへる、あ、もしならば、れん身の詩つくりたまふみそばにはべり、琴などひきて一生を送りたき妾が願よ。たん身の胸の傷を癒しまつるは妾の外にあらじ、

姉君は昨夜とつぎたまひぬ。其日のひる頃どひまゐらせしに例の文机によりたまゐて。妾の入りたるも知らで思に沈みゐたまひぬ。せんやうなくて、みそばにはべりしに、やゝたちてれゝとばかり妾を見ておどろきたまひしが、またいとさびしげにはゝゝみ給ひて、此机によるも今日をかぎりにてまことになごりをしけれど………などかこちたまひぬ、さる日のみ文姉君に見せまつらんと思ひはべりしも、めづらしくもゑみたまへるかばせ見ては、妾の心もたゆみはべりぬ。姉君ま

た、ねん身が兄君の歸りたまふも今十日の後なるに……など、思物はしげなるありさま、兄君よいかで心弱き妾の眼うるほはであるべき。

休にもならば早く歸りたまひてよ。姉君もとつぎたまひて、まことにさびしき身となりはべりぬ。日々指れりかぞへてまちにまてる身ぞや。

兄より

小生は此休暇に戀しき故郷の胸に抱かれんと樂しみたりしも、都合ありて暫く此あたりの山川に放浪したく、隨てねん身にあふことも叶ふまじきか。

老の父君母君によくつかへ給ひてよ。

また絹さんにあはゞよろしくと………

明日旅立の今日なれば、用意にいそがし。さらば。

（完）

